人質

作　Ｔｉｒａ

「お・に・い・ちゃん！」
「あれ。智代か？こんなに早く帰ってきてどうしたんだ？今日は部活じゃなかったのか？」
「うん、部活だったよ。でもサボっちゃった」
「どうしてサボるんだよ。そんな事してたらレギュラーから落とされるぞ」
「たまにはいいじゃん。部活よりも楽しい事、覚えちゃったんだから」
「部活より楽しい事？」
「そうそう。女のカ・イ・カ・ンってのをね」
「お、女の快感って……な、何言ってんだよ」
「お兄ちゃんには分からないだろうなぁ～。この気持ちよさは」
　毎日、女子水泳部の練習を真面目に頑張り、二年生でレギュラーになった妹が部活をサボって帰ってきたのは初めてだ。俺は智代の少しふざけた言い方に苛立ちながらも、いつもとは違う雰囲気に違和感を覚えた。
　嬉しそうに、そしてなぜか頬を赤らめながら話す智代は、思いも寄らない言葉を口にし始めた。
「ねえお兄ちゃん。私とセックスしようよ」
「は、はぁ？」
「やっぱり私も高校生じゃん。セックスくらい経験してるんだから」
「き、急に何を言い出すんだ智代。ふざけるのもいい加減にしろっ」
「そんなに怒んなくってもいいじゃん。こんなに可愛い妹がセックスをせがんでいるんだから。妹の体、興味あるでしょ？お兄ちゃんって大学生だよね。妹よりもナイスバディな女子大生の方が好みかな？」
「どうしたんだよ。今日の智代はどうかしてるぞ」
「ニヒヒ、そうだよ。今日は飛びっきりおかしいんだ。だって私、智代じゃないもん」
「……はぁ？」
「実は～。この体、乗っ取らせてもらいました！」
「……」
「あれ？よく分かってないみたいだな。あのさ、南條智代ってあんたの妹だろ。俺、南條と同じクラスの桃木っていうんだ。よろしくな」
　何を言っているのか分からない。目の前にいるのは確かに妹の智代だが、本人は智代じゃないって言っている。
　体を乗っ取った？　どういう意味だ。
「さっきから何を言ってるんだ？桃木って誰の事だよ。どうしてそんなしゃべり方するんだ」
「だ～か～ら～。俺は南條のクラスメイトで、この体を乗っ取ってるの。どういえば分かるのかな。え～と……幽霊になって憑依しているって感じかな」
「ひ、憑依！？」
「そうそう。だから南條の体は俺の思い通りに操ることが出来るんだ」
「じょ、冗談だろ？今時そんな馬鹿げた話……」
「別に信じて貰わなくても構わないんだけどさ。俺、とにかくこの南條の体でセックスしてみたいんだ。学校のトイレで一人エッチしたらすげぇ気持ちよくて。実際にセック

スしたらどんな感じかなって」
「う、嘘だ……。じょ、冗談だよな智代。俺をからかっているんだろ」
「はぁ～。南條のお兄様はどうすれば信じるのかなぁ。まあ、とりあえず脱ぐからちょっと待ってよ」
「え？ぬ、脱ぐ？」
「そうさ。脱がなきゃセックスできないだろ。俺のツレが相手でも構わなかったんだけどさ。南條の記憶を辿ってみたらあんたに好意を持っていることが分かったんだ。へへ、ブラコンってやつか。それなら南條の意思を尊重して禁断のセックスを楽しもうと思って、わざわざ家に帰ってきたんだよ」
「ほ、本当に……智代じゃないのか」
「別にどっちでもいいけどさ。セックスすることには変わりないんだから」
　信じられない。智代の体が乗っ取られているなんて。俺の妹をクラスメイトの男子生徒が好き勝手に操っているなんて。
　きっと、智代は今日も部活をしたかったに違いない。それなのに、体の自由を奪われ、女子トイレで弄られて家に帰らされたのか――。
「お、おいお前っ！智代の体から離れろっ！」
「それは俺自身で決められないんだ。薬の副作用で、最低でも二十四時間はこのまま体を離れられない」
「何を馬鹿な事を。俺の大事な妹なんだぞっ」
「だから家に帰ってきてやったんだよ。他人の男とセックスさせられているなんて嫌だろ！」
「どうして妹に乗り移ったんだっ」
「実はさ。俺、南條が好きなんだ。で、何度か告ったんだけど嫌だって断られちゃって。仕方がないから南條自身を俺の物にしちゃおうって考えて、ネットから面白いアイテムを購入したんだ。それが幽体離脱して他人の体に憑依する薬。この薬のおかげで、南條の体に入り込むことが出来て、自由に操れるようになったんだ。この声も、体も全て。しかも、南條の記憶まで盗み見ることが出来るんだ。これ、マジですげぇ薬だよ」
「お前みたいなやつ、妹が好きになるはず無いだろ。その薬を中和するようなものはないのかっ」
「さあ。あったとしても、俺は使う気無いし。折角、南條の全てを手に入れたんだ。女の体を楽しまないと損だろ！」
「何てやつだ。このクソガキがっ！」
「あ～。そんな風に言うんだ。自分の立場、分かってるの？今、妹の体を乗っ取られているんだぜ。このまま援交でもしに行こうかなぁ。記憶が読めるんだ。南條に成り切ることなんて簡単なことだからな」
「……」
　そう言われると、手も足も出ない。
　結局、妹の体を人質に取られた俺は、こいつの――桃木という男子生徒の言いなりになるしかないんだ。
　俺は無言で拳を握り締めながら、桃木が乗り移っている智代を睨みつけた。
「そんなに怖い顔するなって。明日の今頃には、俺の魂は自動的に南條の体から抜け出ているんだからさ。それまでは両親にも内緒って事で。とりあえず見せてやるよ。この体がどれだけ発育がいいか」

「お、おい……」
「思春期になってから見てないんだろ？少なくとも、南條の記憶では見せてないって言ってるぜ。もちろん、覗き見しているなら別だけどさ！」
　智代が自らの手で青いリボンを緩め、ブレザーのボタンを一つずつ外してゆく。
　目の前に兄がいるのに――。
「や、やめろ智代っ」
「何、顔を赤くして照れてるんだよ。妹の体に欲情してんの？」
「くっ……。誰が妹の体に欲情するんだっ」
「まあいいや。ちょっと待っててくれよ」
　止める事は出来ないのか？
　俺は、妹が他人の意思で脱がされていく様子をただ眺めていることしか出来なかった。
「先に拝ませてもらったけどさ、水泳部の体ってかなり引き締まっているんだ」
「……見たのか？智代の体を」
「そりゃそうさ。じゃなきゃ、何のために乗り移ったのか分からないじゃないか。いつもなら手も握らせてくれない南條が、俺の思い通りに制服を脱いで、好きなだけ見せてくれるんだから。トイレで裸になって一人エッチするの、スリルがあって結構楽しかったよ」
　ブレザーを脱ぎ捨てた智代が、スカートのホックを外しファスナーを下ろすと、重力に従って足元に落ちていった。白いブラウスの裾から見える下着が妙にいやらしく見える。
　俺の様子を伺いながら緩めていた青いリボンを取り去り、ブラウスのボタンを外してゆく。まるで妹が俺に対してストリップをしている様に思えた。
「ほら、妹の体はこんなに成長しました～」
「……」
　ブラウスを肌蹴させた後、足元に落とした智代は両手を頭の後ろに回し、腰をくねる様にしながらポーズを取った。引き締まったウェストに細い足。でも、ブラジャーに包まれた胸は思っていたよりも大きかった。
「うらやましいなぁ。こんなに可愛くてスタイルのいい妹がいるなんて。もし俺にこんな妹がいたらどうするだろ？」
「も、もういいだろ。早く服を着ろよ」
「何言ってんの？まだ下着姿になっただけじゃん」
「頼むからそれ以上、妹の体を弄ばないでくれ。十分楽しんだんだろ」
「だ～か～ら～、俺はセックスしてみたいんだって。一人エッチよりもセックスの方が気持ちいいに決まってるだろ」
「す、好きな女の子にそういう事をして、お前は何とも思わないのか？」
「むしろ、自分の物になったっていう支配感が沸いてきてウズウズするよ。俺以外の男には触れさせないって。でも、お兄ちゃんは別だからね～。だって兄妹なんだもん！」
　馬鹿げた口調で話しながらも背中に両手を回し、ブラジャーのホックを外している。ブラジャーなんて着たことがない桃木が何の躊躇いもなくブラジャーを取り去るのは、恐らく智代の記憶を読んでいるからだろう。そう思うと尚

更悔しく感じる。
　恥ずかしげもなく胸を披露した智代は、パンティーに手を掛けた。
「お、おいっ！」
「小さいころは風呂でよく見てたんだろ。しっかりと陰毛も生えて、大人の股間になってるぜ！」
　智代の両腕が勢いよく下ろされると、パンティーがスルスルと足を伝い下りていった。
「なっ……」
「へへ。何年ぶりかなぁ、お兄ちゃんに裸を見せるのは。私の体はどうかしらん？」
　まだ黒ずんでいない乳首。そして薄っすらと生えた陰毛。
　妹の智代が俺に全てをさらけ出していた。女の子から女性へと成長を続ける智代の体は、男性を十分に受け入れられる体格になっていると思う。
「大好きなおにいちゃんにマジマジと見られたら、下半身が火照ってくるだろ。やっぱり妹といっても女だもんな。興味ないほうがおかしいって事か」
「ば、馬鹿な事を言うな！妹に欲情するはずないだろっ」
「誰も欲情しているなんて言ってないのに。……っていうか、勃起してるだろ。短パンが随分と盛り上がっているようだけど」
　不覚だった。理性の中では否定しているものの、体は無条件に反応してしまっていた。俺は、大きく膨らんでしまった黒い短パンの股間を両手で隠した。
「今更隠したって遅いって。何だかんだ言っても、妹と犯りたいんだろ？」
「ち、違うっ。俺はそんな事、一つも思っていないっ」
「そんなにアレを大きくさせていても？　それはおかしいんじゃないか」
「だ、黙れっ！」
「妹に手や口でされたり。一度やっちゃえば抵抗感も無くなるんじゃない？」
「お、俺は絶対に嫌だっ。智代がそんな事をする姿なんて見たくないっ！」
　耐えられなくなった俺は、思わず部屋を飛び出して一階のリビングへと駆け下りた。何度も深呼吸し、気持ちを落ち着ける。
「はぁ、ふぅ、ふぅ～。くそっ！どうすればいいんだ。俺、このまま智代と……」
　ソファーに座り、頭を抱えて一分も経たない間に階段を下りる音が聞えた。桃木が智代の体を操り、一階に下りて来たんだ。
「それじゃ、ちょっと男を誘ってくるよ」
「えっ！？」
　慌てて立ち上がり玄関に駆け寄ると、智代が裸のまま靴を履いているところだった。
「なっ！ま、待てよっ」
「はぁ？」
「何考えてるんだっ。そんな姿で表に出たら……」
「別にいいじゃん。あんたが相手してくれないなら適当な男を捕まえるだけだから。このまま裸で外に出たら、皆どう思うだろうなぁ」
「や、やめろっ！絶対に出るなっ」
「あれ？それじゃあ、あんたが相手をしてくれるのか？」

「そ、それは……」
「選択権をやるよ。その代わり拒否権は無いからな」
「くっ……」
大事な妹が見知らぬ男の手に掛かるなんてあり得ない。
そんな事なら兄の俺が――。
「答え、出てるんだろ。俺はあんたの部屋に戻ってるから、気持ちが整理できたらシャワーを浴びて戻ってきてくれよ。もちろん裸でな。まだ両親は帰ってくる時間じゃない事は南條の記憶から分かってるんだ」
「……守れよ」
「何を？」
「一度だけだ。一度だけやったら絶対に智代の体に手を出すな」
「……それは俺の勝手だろ？明日の昼間では体を離れられないんだから」
「妹の体に入られているだけで非常に不愉快なんだ。これ以上は望まないでくれ」
「それは一度セックスしてから考えるよ。十分満足したら何もしないかもしれない……とだけ言っておくよ。あんたのテク次第って事で」
「何てやつだ……。元の体に戻ったら、絶対にぶっ飛ばしてやるからな」
「まあ、誰も俺が南條の体に乗り移っていたなんて思わないだろうから、いきなり殴られる俺は被害者って事になるだけだな。慰謝料をたんまり貰って、殴られた事をネタに南條と付き合うってのもいいか」
「くっ……」
妹の体じゃなかったら――。
俺の大事な妹の体じゃなかったら――。
俺は悔しさの詰まった拳をどこにも撃つことが出来なかった。
「そんなに怒るなって。たかが一日じゃないか。俺と一緒にもっと気楽に楽しんでくれよ。じゃあ先に部屋に戻ってるからな。早く来てね、お兄ちゃん！」
「……く、くそ～っ！」
湧き上がる感情を抑え切れなかった俺は、階段を駆け上がる智代の背中に思い切り叫んだ――。
割り切る覚悟が必要だ。
相手は妹であって、妹ではない。桃木という男が女に成りすまして俺に迫ってきているんだ。だから俺は変態を相手にセックスするだけ。そうさ！本当の智代は今頃、高校で部活に精を出しているんだ。
「……」
必死に自分を納得させてシャワーを浴びた後、部屋に戻った俺の目の前に立っていたのは、スクール水着に身を包んだ智代だった。
「遅かったね、お兄ちゃん」
「な、何だその格好は……」
「この方がお兄ちゃんもそそられるかなって。だって、私に部活を頑張って欲しいんでしょ。これ、競泳水着じゃないけど部活をしている姿に見えるよね」
「や、やめろよ。そのしゃべり方は」
「どうして？この方が普段の私らしいでしょ」
俺の頭の中から、変態の桃木をイメージする能力が失われてしまった。わざと智代のしゃべり方を真似し、成り切っている。

臭い芝居をしやがって――と思いたいけど、どう考えても智代にしか見えなかった。
「だ、だから嫌なんだ。妹だと思いたくないんだよ」
「どうしてよ。私がお兄ちゃんの妹じゃないって言うの？」
「そうじゃなくて、お前は桃木だろっ！」
「そんな風に言わないで。私はお兄ちゃんのただ一人の妹なんだよ。ずっとお兄ちゃんの事が好きなのに」
「そこまでしなくてもいいだろ。お前はセックスがしたいだけなんだ。早く済ませて大人しくしてくれよ」
「うふっ、慌てないで。お兄ちゃんはすぐにアレが勃起するけど、私のアソコ濡れるまで時間が掛かるの。だからお兄ちゃんに弄ってもらわないと……。先に楽しませてあげるから、後からじっくりと弄ってね！」
智代が俺の手を引き、ベッドの淵に座らせた。そして腰に巻いていたバスタオルを解き、隠していた肉棒を露にする。
「なんだ、やっぱり勃起してたんだ。これなら勝負も早いね」
「も、桃木。頼むからそのしゃべり方は……うっ」
「どうかな。妹の手でしごかれるのは？」
上目遣いで俺を見ながら右手で肉棒を握り締め、上下にしごいている。嫌だと思っているのに、体はどうして反応してしまうんだろう。
七十歳のお婆さんにしごかれても、同じように勃起するんだろうか。同じ大学の男友達にしごかれても――。
「うっ……うう」
「私、お兄ちゃんがどうすれば気持ちいいか分かるよ。こうして玉を触られるのも気持ちいいよね」
智代の左手が二つの玉を優しく撫で、掌で転がし始めた。男がこうされると気持ちがいいという感覚を、妹を乗っ取る桃木は知っている。だからしごき方も絶妙。しかもスクール水着を着せているなんて反則だ。裸でされるよりも視覚的に興奮してしまう。覗き見える水着の胸元も、深い谷間が出来てセクシーだ。微笑みながら俺の顔と肉棒に視線を送り、何度もしごいている。
「はっ、はぁ、はぁ、はぁ」
「すごく気持ちよさそうだね。今度は口でしてあげようか？」
「そ、それだけはやめてくれ。妹が口でするなんて……お願いだからそれだけは」
「……そんなに嫌なの？私、フェラチオくらい簡単に出来るのに」
「そういう問題じゃない。分かるだろ……俺の妹なんだぞ」
「普通は妹にフェラチオなんてしてもらえないんだよ。勿体無いと思わないの？」
「思わない。全然思わないっ」
「……そうなんだ。まあ、俺も……ううん、私もちょっと抵抗があるからフェラはやめにしてあげる。じゃあベッドに仰向けになって寝転んでよ」
「わ、分かった……」
さすがに男の桃木にも抵抗があるようだ。ホッとした俺は、言われたとおりベッドに仰向けになって寝転んだ。すると智代が俺の体を跨ぐように、シックスナインの体勢になって乗りかかってきた。目の前にはスクール水着に包ま

れた妹の股間がある。
「フェラの代わりにパイズリしてあげるよ。ちょっと待ってね」
「パ、パイズリって……うっ」
亀頭に何かが落ちてきた。頭を上げて見ると、智代が唾を垂らしている。
「な、何やってんだよっ」
「そのままじゃ摩擦があるから、唾をつけて潤滑剤の代わりにしているの。こうして手で広げて……」
「うっ、くぅっ」
何回も唾を垂らし、肉棒全体に塗り広げている。こんな事を妹にさせるなんて信じられないが、桃木は更に智代の体を使って俺を驚かせた。
「じゃ、パイズリしてあげる」
「パイズリって、この体勢でするのか？」
「そうだよ。こうして胸の谷間に差し込んでね！」
「うあっ……。ううっ」
「どう？気持ちいいでしょ、私の胸」
シックスナインの体勢になった理由が分かった。桃木はスクール水着の胸元を少し引っ張り、肉棒をその隙間に差し入れたんだ。胸元に潜り込んだ肉棒は、丁度胸の谷間に収まっている。そのまま体が前後に動くと、スクール水着の生地で胸の谷間に押し付けられた肉棒が絶妙に擦れた。
智代はお尻を上げ、上半身を俺の下半身に密着させるような体勢を取りながらパイズリを続ける。
何て柔らかい胸なんだ。ダメだと分かっていても、この気持ちよさには逆らえない。
俺は目の前にある智代の股間から目を逸らし、シーツを握り締めながら必死にイクのを我慢した。
「あっ……ん。お兄ちゃんのアレがスクール水着の中に入ってきて、胸の谷間で踊ってるよ。はぁ、はぁ。すごくいやらしいよ」
「い、言うな……。智代の真似をしてそんな事を言うなっ。うっ、ううっ」
「でも、お兄ちゃんのアレはすごく嬉しそうだよ。私の胸が大好きなのかな？もう少し大きく動いてみるね」
「はぁ、はぁ、はぁ。うっ、はぁ、くっ」
智代がこれまでよりも更に大きなストロークで体を揺すり始めた。それだけではなく、水着の胸元を右手で押さえ、胸の間に肉棒を強く擦り付けている。
ゆっくりではあるものの、柔らかい胸とスクール水着の生地に押し付けられた肉棒には、もはや我慢の余地が無かった。
「はぁ、はぁ、いいよ。スクール水着の中でイっても。お兄ちゃんの精液が水着に染み込むなんて。私、すごく興奮するもん」
「くっ……。くそっ！くそぉ。はぁ、はぁ、はぁ……う、うあっ！」
その快感に、どうしても耐えられなかった。グッと目を瞑り全身に力を入れると、妹のスクール水着の中に射精してしまった。
「あっ……出たんだ。妹の水着の中に射精するなんて、お兄ちゃんって変態だね。異常だよ」
「はぁ、はぁ、はぁ、くぅ～」
何を言われても仕方が無い。
桃木が乗り移っているとはいえ、妹の胸でイッてしまっ

た事実にどうしようもない罪悪感を覚えた。
「あ～あ。見てよお兄ちゃん。こんなにべっとりと付いちゃった」
スクール水着から肉棒を引き抜いた智代は、体を反転させて俺の下腹部に女座りした。胸元から鳩尾辺りの生地に精液が滲み、濃い紺色になっている。すでに射精時の快感は消え失せ、後悔の念に駆られる俺の気持ちを無視する桃木は、智代の両手をスクール水着の両脇から忍ばせ、精液を胸に塗り広げ始めた。水着の生地に指の形が浮かび上がり、その指がいやらしく胸を弄る様子がうかがい知れる。
「んっ。お兄ちゃんのネットリとした精液が水着の中で広がってヌルヌルしてるよ。はんっ……。乳首、勃っちゃった」
「……」
智代は水着から手を抜き、生地の上に薄っすらと膨らんだ乳首を両手の人差し指で擦って勃起している事を俺に見せ付けた。気持ちよさそうに、それでいて自慢げな笑顔で俺を見る智代に、また肉棒が元気を取り戻してしまう。これだけ気持ちが落ち込んでいても、節操のない俺の体は性欲という生理的欲求に従い自然に反応してしまうんだ。妹でなければ、この生理的欲求を何の躊躇もなく受け入れ、欲望のままに行動するのに。
「今度はお兄ちゃんが私を気持ちよくしてくれる番だよ。でも、水着は脱がさないでね。この姿でセックスしたいから」
「……やっぱりしなければならないのか？」
「しなければならないのかって……。お兄ちゃん、イッて間もないのにもう勃起してるじゃない。素直に妹を犯したいって言えばいいのに」
「何を馬鹿なことをっ！だから体が勝手に反応しているだけで、俺は一度もしたいなんて思ってないんだ」
「お兄ちゃんがどう思っていても、私を犯すしか道はないんだよ。さっき自分で選択したじゃない。言い訳ばかりしていないで、男らしく私を犯してよ」
そう言われて、「分かった。俺、智代を抱くよ」なんて言葉は絶対に言えない。
「おに～ちゃん！大好きだよ～」
「お、おいっ。やめろよっ」
「だってぇ～。お兄ちゃんがなかなか手を出してくれないんだもん」
智代が可愛らしい笑顔を作りながら抱きついてきた。俺の背中に手を回し、舌を使って首筋や乳首を愛撫してくる。
「やめろって言ってるだろっ！」
「やめな～い」
「いい加減にしてくれよっ」
「へへっ……」
「いっ！」
一瞬、何が起こったのか分からなかった。目の前に星が飛んだかと思えば、頬に強烈な痛みが走る。智代が――俺の頬を思い切り叩いたんだ。そして険しい表情で俺を睨みつけ、汚い言葉で話し始めた。
「いつまでもチンタラ言ってないで、さっさと愛撫しろよ。次に俺の言う事を聞かなかったら、マジで他人に犯されてやるぞ」
「なっ……」

「もう一度だけ聞いてやるよ。あんたと他人、どっちが妹を犯すんだ？」
「……」
「どっちが犯すんだよっ」
「た、頼むから……言わせないでくれ。言いたくないんだ。こ、行動で示すから」
もうこれ以上は拒めない。
意を決して妹の体を抱き寄せると、険しかった智代の表情が和らぎ、胸に頬を摺り寄せた。
そしてスクール水着の背中を優しく撫でてやると、「私が横になるよ」と俺の体から下り、隣に仰向けになって寝転んだ。
「な、なあ桃木。せめて智代のしゃべり方は止めてくれないか？頼むよ」
「ダメだよお兄ちゃん。なかなか愛撫してくれなかった罰だから」
「……そうか。分かったよ」
せめて自分のしゃべり方をしてくれれば気持ちも紛れると思ったけど、桃木は受け入れてくれなかった。
目の前に横たわる妹の体。俺は今から妹を抱くんだ。俺の意思で妹を愛撫し、犯すんだ。
ごめん智代。お兄ちゃんな、お前の知らない間にお前の体とセックスしてしまうんだ。でも、こうしなければお前は見知らぬ男に抱かれることになる。もしかしたら、妊娠させられるかもしれないんだ。
だから――。
「んっ……」
スクール水着に包まれた胸に手を添えると、智代は鼻に掛かった小さな声を漏らしながら俺を見つめた。
優しく揉んでみると、その柔らかさと弾力が掌いっぱいに広がる。妹が女性だと言う事を再度認識した瞬間でもあった。隣で左肘を立てて寝転がり、右手で精液が染み込んだ生地に包まれる二つの胸を交合に揉むと、可愛らしい唇の隙間から「んっ、ふっ」と切ない声を出した。
「ねえお兄ちゃん。妹の胸を揉むってどんな感じ？」
「……べ、別に」
「興奮する？」
「揉みたくて揉んでいるわけじゃないだろ。興奮なんてしない」
「ふ～ん、勃起したアレで興奮しないって言われてもねぇ。じゃあ直接揉んでみてよ」
「えっ……」
智代は悪戯っぽい目で俺を見つめながら右手を頭の後ろに回し、左手で右脇の水着を上に引っ張った。肌色の乳房と生地の間に隙間が出来、水着の中が少し見えている。
「ほら。さっき私がしたように、水着の中に手を入れて揉んでよ」
「……」
水着を脱がないで愛撫するとはこういう事か。
躊躇いながらも、その隙間に右手をゆっくりと忍ばせた。柔らかい乳房を指の先で押しつぶしながら差し入れてゆくと、手の形が水着の生地に浮かび上がる。手首まで入れたところで、水着を引っ張っていた智代の手が離れた。
「好きに揉んでいいんだよ。私、お兄ちゃんの手がどういう風に動くのか見てるから」
両手を頭の後ろに回した智代は、歪に盛り上がった水着

の胸元を眺めていた。掌には、精液で滑った胸が丸ごと一つ収まっている。そして中指の付け根辺りに勃起した乳首の感触が。

妹の胸を直に触り、揉みしだくのは大きな抵抗感がある。しかし、拒むことは出来ないんだ。

水着に忍び込んだ右手の指を動かすと、生地がいやらしく蠢き始める。それに合わせて智代の口から、また切ない吐息が漏れた。

「あっ、あっ。お兄ちゃんが私の胸を揉んでる。私、妹なのに」

「い、言わないでくれ」

桃木は俺を苦しめるため、わざと「お兄ちゃん」という言葉を連呼した。妹を弄り、犯そうとしている事を強烈にイメージさせるためだろう。それが策略と分かっていても、実際に智代の体に愛撫を行っているんだから精神的にきつくなる。その気持ちに反し、女性の体を触るという行為に興奮している肉棒。心臓もドキドキと激しく脈打っている。

俺は更に奥に手を忍ばせ、左の胸を掌で包み込んだ。腕の一部が水着の中に入り込み、右胸を押しつぶしている。

「んっ、んんっ。気持ちいいよ。乳首も弄ってね」

その言葉に従い、親指と人差し指で勃起した乳首を摘んでコリコリと捻ると、智代の体がビクビクと震えた。

「あ、あんっ！い、いいっ。もっといっぱい弄って。はぁ、あん」

智代は手の形が浮かび上がる水着を見ながら喘いだ。こんなに切ない表情で喘ぐ妹を見るのは初めてだ。左右の乳首を交合に弄り、智代の表情を眺める。はぁはぁと息を乱しながら目を潤ませ、時折唾を飲み込む様子は、半年前から付き合い始めた同じ大学の初美を連想させた。女性は皆、大人に近づくとこういう表情が出来るようになるのかもしれない。

「ねえお兄ちゃん、今度は下の方も弄ってよ。指でクチュクチュ掻き回して」

「下の方も……」

「そうだよ。お兄ちゃんも知ってるでしょ。女子のスクール水着って下腹部のところから手を入れられるの」

俺の手を水着から引き抜いた智代は、代わりに自らの両手を水着に忍ばせ胸を揉み始めた。合わせて、両膝を立てM字に足を開く。その様子を見ながら上半身を起こし、下腹部の生地を捲った俺は、その中に手を差し入れた。陰毛に指が触れ、生温かい感触が伝わってくる。更に奥に手を押し込むと、滑った陰唇にたどり着く。中指を軽く曲げると割れ目にめり込み、入口や小豆に触れてしまった。

「んはっ！お兄ちゃん。それ、私のお豆だよ。私のお豆を弄ったんだよ。はあんっ」

「いちいちわざとらしく解説しないでくれよ。言われる通りにやっているだろ」

「そんなの私の勝手でしょ。かなり濡れてるよね。胸を愛撫されたらすっかり感じちゃったみたい。でも、私がいいって言うまでお豆やアソコを弄ってね」

盛り上がった生地の向こうで、俺の手が妹の股間をいやらしく弄り回している。開いた足をビクビクと震わせ、背中を反らせる智代はとても気持ちよさそうな表情をしていた。

裏返った艶やかな喘ぎ声。精液で汚れたスクール水着

が、大きく円を描く智代の手によって歪に伸縮を繰り返している。俺が弄る股間の生地も愛液が染み込み、胸元と同じように濃い群青色に変化していた。指を動かすことで、生地の向こうからクチュクチュといやらしい音が聞えてくる。そして十分に濡れたアソコは異様に温かかった。

「あ、あんっ。ああっ！サイコーに気持ちよくて蕩けそう。やっぱり一人エッチよりも愛撫されるほうが断然気持ちいいよ。おかげで軽くイッちゃったみたい。お兄ちゃん、そろそろセックスしようか。好きな体位で犯されてあげるよ。正常位がいい？　それともバックから？　駅弁でもいいよ。でも騎乗位は私が動かなくちゃならないから出来れば避けて欲しいんだけど」

どれも選びたくないけど、これも妹の被害を最小限に済ませるためだ。俺さえ我慢すれば桃木は満足し、明日には大人しく智代の体を解放するはず。そう、全部智代のためなんだ。そう思うしかなかった。

「じゃあ……せ、正常位で」

「ふ～ん。ノーマルな体位なんだ。まあいいか、お兄ちゃんが犯してくれるなら。でもすぐにイッちゃだめだよ。ちゃんと私を最後までイカせてね。大好きなお兄ちゃん！」

智代は水着に両手を忍ばせたまま、更に足を大きく開いた。その間に体を入れて足を崩し、愛液の染み込んだ股間の生地を横にずらす。滑った愛液でいやらしく光る股間は、大人の女性と何ら変わらなかった。

「ジロジロと見たら恥ずかしいよ。そんなに妹のアソコが見たかったの？」

「馬鹿なっ。そんなはずないだろっ」

「それにしては食い入るように見ていたけど。ほら、早くその勃起したアレを私のアソコに入れてよ」

俺は一度天井に顔を向け、大きく深呼吸した。今から妹を犯すんだ。大切な妹を汚してしまうんだ。

「早くぅ～」

「……わ、分かった」

もう後戻りできない。期待に胸を膨らませるような表情で見つめる智代の入口にムスコを押し当てた俺は、ゆっくりと腰を押し込んでいった。

「んっ」

ムスコが滑ったアソコに飲み込まれてゆく。徐々に入り込んで行くにつれて、温かいアソコが滑った液を絡ませながら撫でる様に迎えてくれた。根元まで差込み終えると、ニヤけていた智代が眉を歪め、切ない表情をする。

「あっん。はぁ～。お兄ちゃんのアレが全部入っちゃったんだ。分かる？私の下腹部に埋まっているんだよ。今、妹を犯した瞬間なんだよ」

「くっ……」

「早く動いて。私を思い切り犯して」

俺は智代の腰を軽く持って、正常位のままゆっくりと腰を動かした。愛液で滑ったムスコがアソコから出てくると、また中に入り込んでゆく。何の抵抗もせずに兄に犯される妹の表情は嬉しそうだった。少し勢いよく腰を打ち付けると、「あんっ」と喘いで胸を揺らせた。

「はぁん。はぁ、はぁ。ねえお兄ちゃん、私とセックスして気持ちいい？」

「……大事な妹としているんだ。それくら分かるだろ」

「気持ちいいんだね。妹を犯すことに興奮しているんだ。一生セックスなんて出来るはずがない妹を、こうして犯し

ているんだもん」
「言うなっ。それ以上、口にするなっ」
「こんなに素直に犯される妹なんて中々いないよ。お兄ちゃんってラッキーだね」
「う、うるさいっ。言うなって言ってるだろ」
「じゃあ、言えないくらい激しく犯してよ。そのお兄ちゃんのいきり立ったアレで私をグチャグチャに犯しまくってよ」
「く、くそっ！どこまでも馬鹿にしやがって」
桃木の挑発に対する怒りを爆発させた俺は、無我夢中で腰を振り始めた。智代の体が激しく前後に動き、胸が円を描くように揺れている。
「あっ、あっ、はあっ、ああ、あっ、あんっ。す、すごいよお兄ちゃんっ……。お兄ちゃんがっ……お兄ちゃんが子宮を突き上げてるよっ」
「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ、はぁ」
「激しっ……。あっ、あひっ。すげっ……気持ちいいっ！ああっ、あんっ、は、はぁっ」
上半身を倒し、喘ぎ乱れる頭を抱きしめながら大きなストロークでアソコを突くと、桃木が智代の腕を使って抱きしめ返してきた。背中に爪を立て、気持ちよさを表現している。耳の中に舌を入れると、ビクンと体を震わせた。
「あ、ああっ。ちょ、ちょっと待って。き、気持ちよすぎてっ……あっ、あっ、ああっ。やばいっ」
「はぁ、はぁ、うっ。はぁはぁ」
さすがに桃木も智代の体が発する快感に酔いしれ、成り切ることが出来なくなっているようだ。初めて桃木に勝っている気がした俺は、思い切り智代の体を抱きしめると、命一杯腰を振った。出来るだけ速く、出来るだけ奥まで。
「あうっ、あっ、あふっ。ああっ！あっ、イイッ！すげぇっ。あっ、あっ、はあっ、あっあっあっ」
「はぁっ、はっ、早くイケよ。智代の体でイキたかったんだろ。ほらっ、早くイケって」
「んっ、んあっ。あっはっ……あっ。はぁ、はぁっ、あっ……ああっ」
耳元で顎を上げながら可愛くも大人びた声で悶える智代が、どうしようもなく愛しかった。こんな感情を抱くなんて生まれて初めてだ。桃木に乗り移られ、知らない間に俺とセックスさせられる智代はどう思っているんだろうか。
大事な妹を自ら犯す俺は、最後の力を振り絞って智代を突き上げた。下半身がぶつかり合う肉音。そしてムスコがアソコをかき回すいやらしい水音。
「あっ、あっあっあんっ、あんっ！あふっ。ああっ！イ、イクッ！」
「はぁ、はぁ、はぁっ、あっ、はぁ、はぁ」
「あああっ。ああっ、あああああっ……はっ、んあっ……んあああ～っ」
「は、はぁ、くうっ！」
アソコが痙攣し、肉棒を強く締め付ける。その感覚に、俺はイキそうになり腰を引いた。しかし、信じられない事に絶頂を迎えた智代の両足が俺の腰に巻きつき、力強く引き付けた。
「あっ！ちょっ……」
「あふっ……ああぁ～」
「ううっ！だ、だめだっ！」

何てことだ。
腰を引くタイミングを逃した俺は、アソコに入れたまま白い分身達を出してまった。妹のアソコに出してしまうなんて――。
ビクビクと震える智代の体から力が抜け、腰に巻きつけられていた足がベッドに落ちる。はぁはぁと息をする智代は、目を瞑ったまま俺の背中を抱きしめていた腕を解放した。
「はあ、はぁ。ど、どうしよう……」
腰を引き、アソコからムスコを抜いた俺は、急いでティッシュを手に取り、アソコに残った精液を掻き出そうと智代の足を開いた。しかし、智代は自ら足を閉じてしまう。
「お、おいっ！足を開けよ。中に……中に出してしまったんだ。大事な妹の中に出してしまったんだ。早く掻き出さないとっ」
「……大丈夫だよお兄ちゃん。ちょっとこっちに来て」
「頼むから足を開いてくれよ。このままじゃ、智代が…」
「だから。……とにかくお願い」
「ど、どういうつもりだ。そこまで俺達を陥れたいのか」
「お兄ちゃん、それ以上言わなくてもいいよ」
智代は上半身を起こすと、動揺を隠し切れない俺の首に腕を回し、そのままベッドに倒れ始めた。俺も智代と共にベッドに倒れ、覆いかぶさる体勢になってしまう。
「頼むよ桃木。こうしている間にも智代の中に……」
「大丈夫。今日は安全日だから」
「えっ……」
「大丈夫だよ、お兄ちゃん」
「……」
「ずっと見てたの。お兄ちゃんが私を心配してくれていた事」
「……えっ？」
「私、智代だよ。桃木君、私の体から出て行ったの」
「……う、嘘だ。また智代に成りすましているんだろっ」
「ううん、ほんとだよ。私の体がイッた瞬間、桃木君の魂がはじき出されたの」
「……そんなの信じられない。だって桃木は明日まで体から抜け出せないって言ってたじゃないか」
「そうなんだけど、私の……女の子の体を初めて知った瞬間、びっくりしちゃったみたい。ほんとに私なんだよ」
「……」
優しい笑顔で見つめ返してくる智代に、桃木の雰囲気は感じられない。本当に智代の体から出て行ったんだろうか？まだ信じられないけど、智代の笑顔を見ていると動揺していた心に落ち着きを取り戻すことが出来る。
智代は俺の背中に両手を回し、爪で引っかいたあたりを優しく撫でてくれた。
「ごめんねお兄ちゃん。痛かったでしょ」
「い、いや……」
「私ね、桃木君に乗り移られた後、意識の奥底で勝手に動く体やしゃべる口を止めようと必死に働きかけたの。でも、桃木君の魂はずっと私の体を支配していて、何の抵抗できなかった。お兄ちゃんを苦しめるような言葉を言ったり、無理やりエッチな事をさせたり。嫌なのに……こんな事をさせられるのは嫌なのに」
「ち、智代……」

「桃木君は記憶を盗み出して……お兄ちゃんに対する私の気持ちを言っちゃったんだ。その時が一番辛かった……」
「……」
俺はどう返答すればいいのか分からなかった。目に涙を滲ませながら一度視線を逸らせた智代は少し間を置くと、俺を見ながら話を続けた。
「でも……。桃木君の仕業だったけど、お兄ちゃんは私を受け入れてくれた。あ、あの……お兄ちゃん。私とエッチするなんて、すごく嫌だったよね？」
「そ、そりゃ……。大事な妹の体を傷つけたいと思う兄なんていないだろ」
「うん……。でもそうじゃない。そうじゃないの。妹じゃなくて、その……」
「……そうだな。俺さ、もし智代が妹じゃなかったら一人の女性として愛していたと思う。こうしてセックスするのも自然だし、結婚だって考えていたかもな」
「ほんと？ほんとに？」
「ああ。ほんとさ」
「お兄ちゃん……」
ゆっくりと目を閉じた智代の頬を、涙が伝い落ちた。そんな妹を優しく抱きしめた俺は、頬に軽くキスをした。
「大好きだよ、お兄ちゃん」
「智代……」
「まだお母さん達、帰ってこないよね」
「そうだな。今のうちに汚れた水着を洗っておかないと」
「水着はいいよ。またこっそりと洗っておくから」
「……そうか。じゃあ任せるよ」
「うん。あの……お兄ちゃん」
「んん？」
「私とエッチして……き、気持ちよかった？」
「えっ……」
「ご……ごめんね。変な事を聞いて」
「智代は……どうだったんだ？」
「えっ、わ……私？」
「ああ。桃木に操られていた時って、その……き、気持ちよさとかは分かっていたのか？」
「……うん。分かってた」
「そ、そうか」
「お兄ちゃん……素敵だったよ」
顔を赤らめた智代が何を言いたいのか、そして何がしたいのかは何となく分かっていた。でも、これ以上の過ちは犯したくない。そう思った俺は、智代の体から離れベッドに座った。
「あのさ、やっぱり智代は俺の大事な妹だ。だからこれ以上、汚したくないんだ」
「えっ……。私、汚されたなんて思ってないよ。どうして私達、兄妹で生まれてきちゃったのかな」
「そういう運命だったんだから仕方ないよ」
「酷いよね、神様って」
「……そうだな」
「妹が兄を好きになって、エッチがしたいって思うなんておかしいよね……」
「……まあな。でも好きになるっていう感情を持つことはダメじゃないと思うし、誰に制限されるものでもないんじゃないか。感情だけなら……な」
「……うん。それじゃ……私、ずっとお兄ちゃんの事が好

きでも構わない？」
「ああ、俺も智代の事が好きだよ。大事な大事な妹さ」
「……ありがと。お兄ちゃん」
　こうして俺達兄妹の、誰にもいえない体験が終わった。
智代が桃木に操られ、無理やりセックスさせられたことで精神的に大きなダメージを受けてしまうと思っていたけど、話してみるとそうでもなかったようだ。俺自身も、そんな智代を見てホッと胸を撫で下ろす事が出来る。自分が犯してしまった罪は一生、心に残るだろうけど。
　そして、桃木が何かしてくるかもしれないと警戒していたけど、一週間経った今でも現れなかった。智代が学校で苛められているのではと心配したが、毎日元気に学校へ行き、しっかりと部活を終えて帰ってきている。
　後から思ったけど、もしかしたら桃木は智代に協力していたのではないだろうか？智代が俺と関係を持ちたいがために桃木に乗り移ってもらい、強引にセックスを求めたとか。
　まさか智代がそこまで俺の事を想っているとは考えられないけど、冷静に考えれば考えるほどそんな風に思えてくる。わざと安全日を選んだんじゃないかとか、俺をその気にさせるためにスクール水着を着るよう、桃木に指示していたとか。
「さすがに考えすぎかな」
　風呂の中でぼんやりと考えていた俺は、バスルームを出るとリビングのソファーに座っている智代に声を掛けた。
「風呂、上がったから入れよ」
「うん、分かったよお兄ちゃん。すぐ入るからね」
　俺を見る瞳が少し潤んでいる。一週間前に体験した後から、俺に対しての見方が変わったような――まるで恋人と会話をしているように見えて仕方がない。そう感じる俺自身が、智代に対して感情を抱いてしまっているのかも。
　ソファーから立ち上がり、バスルームへ向かう妹の後姿に何故か鼓動が早くなった俺は頭を数回叩いた後、自分の部屋に戻った――。

人質……終わり